

幼小連携の充実に資する システム・ツールの開発

学籍番号 189961

氏名 原 なつみ

主指導教員 木原 俊行

1. 幼小連携に関わる今日的課題

本章では、日本における幼小連携に関わる今日的課題を明らかにする。まず、幼小連携の重要性を全国が認識したきっかけである、「小1プロブレム」について触れ、幼小連携の現状と課題について述べる。次いで、M市における幼小連携の現状について調査し、そこから判明した実態と課題について述べる。さらに、M市において幼小連携を推進するためには、幼小連携コーディネーターという役割が必要であること、その内容について言及する。

2. K小学校区における幼小連携の実態

本章では研究協力校であるK小学校の幼小連携について、アンケート調査とインタビュー調査を実施し、そこから見えてきた実態を述べる。まずはアンケート作成の過程とその結果について述べる。そして、インタビュー調査の計画と結果について述べる。最後に、両調査から判明したK小学校区における幼小連携の課題の所在と、解決に向けた手立てを述べる。

3. システム・ツールのデザイン及び運営計画

前章において、システム（組織作り）とツール（交流会等）という視点で実践研究を進めていくことを論じた。それを受けて、本章ではシステムを機能させるための具体的な活動を時系列に沿って整理し、運営計画としてあらわす。そして、システムが機能することで生み出されるツールにどのようなものがあるかを述べ、最後に、システムとツールの関係性について説明する。

4.1 年目の活動

著者は幼小連携コーディネーターとして、2018年9月よりシステム・ツールの運営計画に則り、K小学校における幼小連携を推進した。まずはシステム構築に向けての活動について述べる。そして、ツールたる、交流会を開催した。それらの活動について、PDCAサイクルに従い、「計画」、「実施」、「評価」という枠組みで述べる。また、本書の終盤では2年目の活動に向けての計画策定について述べる。

5.2 年目の活動

本章では1年目の幼小連携活動の成果と課題を受けて策定した年間計画を基に、2年目の幼小連携活動について述べる。本章においても、幼小連携の活動について、PDCAサイクルに従い、計画、実践、評価という枠組みで述べる。1年目よりも拡充された2年目の活動である、5年生との交流会や、校庭・体育館開放についても詳しく記されている。

6.システム・ツールの総括的評価

この章ではこれまでの活動を振り返り、著者が幼小連携コーディネーターとして幼小連携の充実に資するシステム・ツール開発のために行った、2年間の活動を総括的に評価する。そして、システム・ツールのそれぞれが幼小連携の充実に資することができたのか、という視点から考察を深める。考察では今後どうすれば幼小連携は継続されていくのかという事にも言及している。さらに、スタートブックの作成に至った経緯を述べる。

7.幼小連携の持続的な発展のために

この章ではスタートブック作成の過程や内容、その活用法について述べる。まずは作成の過程を述べ、内容と構成の詳細を記す。そして、スタートブックは誰がどのように使用し、活用するのかということについても述べる。さらに、スタートブックが今後どのような可能性があるのかということにも言及する。